19世紀ピトレスク派の画家たち（その１）

――ボニントンとポール・ユエ（前半）

Les peintres du pittoresque au 19e siècle (1ère partie)

–Bonington et Paul Huet

石　木　隆　治

Takaharu ISHIKI

地域研究*

要旨

本稿は，フランス・ピトレスクのファイン・アートの部門で重要な役割を果たした画家たち，ボニントンとポール・ユエの紹介である。

フランスでは17世紀における火山，嵐などの風景画を受けて，1820年からは『古のフランス，ピトレスク・ロマンティック紀行』（紀要にて紹介済み）が刊行され，ピトレスク派の勢いは自ずから高まったが，そうした動きを踏まえてアカデミーの世界で奮闘した二人の画家の紹介を試みる。

フランス育ちの英国人としてボニントンは，水彩画，リトグラフィーでの成功をめざすなかで，ひとびとの美学的崇拝の対象地をローマからノルマンディー，英国へと向けさせた，ということは，美学の方向性を古典派からロマン主義へと展開させる大きな功績のあった人物であるが，夭折してピトレスクの運動の大きな発展をみることができなかった。

また，ポール・ユエはエトルタ，トゥルーヴィルなど，その後の印象派の画家たちが好んで描くようになるノルマンディーの代表的なピトレスクな土地の発見者としてよく知られている（ユエの紹介は，「その２」に続く）

＊Department of area studies